

# 土井たか子

日本のアキノ誕生ノ和製サッチャー登場!! などなど、社会党委員長就任当時は「客寄せパンダ」と言われるほどの大フィーバーでマスコミを賑わしていたのがこの人、土井（おたかさん）たか子氏である。

## △PROFILE△

1928年11月30日、神戸生まれ。本名、多賀子。168センチ、59キロ。趣味、カラオケ・パチンコ。好物、タコヤキ・ヤキモ。京都女子大卒業後、同志社法学部入学、その後法学研究科に進み、卒業後は同志社大・関西学院などの講師を勤める。

1969年、故成田知己社会党委員長の要請を受けて兵庫二区より立候補して初当選。党公害追放運動本部事務局長・外務部会長などを経て83年副委員長に。87年七期目の当選を果たした後、社会党委員長に就任した。

——以上が今さら言うまでも無く皆さんご衆知の、「明るく気さくな」彼女の経歴である。いわゆる憲法学者として教鞭を取っていたのだが、場を国会あるいは外務委員会等に変えて熱弁をふるうようになったわけである。スカッと爽やか公明正大な彼女が初の女性党首、しかも第一野党の社会党党首として颯爽と現れたことは、モヤモヤと

すっきりしない政界・政治家達にウンザリしていた我々国民にとって思わず注目・期待してしまう、まさにセンセーショナルな出来事といえよう。

しかし、それゆえに課題は山積みであり、政局も大きな局面の変化を見せていて非常に難しい時期に突入してきたようである。現に自民党が総裁選の候補擁立で派閥が内紛のまっ最中で、まあ誰が総裁になったところでたいして変化は無いと思うが、こんな時世だからこそ誰かが突破口を開いてズズズイッと頑張ってくれるのを誰しも望んでいるのではないだろうか。まだまだ男性偏重が根強いこの社会で、「直情径行が弱点」という彼女には風当たりも強いだろうし、様々な難関が待ち構えているだろうが替否両論・注目・期待の閃光を切っ先に突き進み、是非とも頑張っていたきたいと思うのである。

(C・T)

## 創刊号切抜帖 新譜ジャーナル

『花はどこへいった』ピート・シガー、『若者たち』ブロードサイド・フォー、『この広い野原いっぱい』森山良子、『海は恋している』ザ・リガニーズ、『友よ』岡林信康、『帰って来たヨッパライ』・『青年は荒野をめざす』・『悲しくてやりきれない』・『イムジン河』ザ・フォーク・クルセダーズ、『受験生ブルース』高石友也、『小さな日記』フォーク・フランシスの場合』新谷のり子、『白いブランコ』ピリー・パンパン、『誰もいない海』大木康子、『風』シューベルツ、『白いサンゴ礁』ズー・ニー・ブー、『遠い世界に』五つの子の赤い風船、『さよならを言う前に』小林啓子、『白い色は恋人の色』ベッツィ&クリス。昭和四十三年九月一日に創刊した音楽雑誌『新譜ジャーナル』（自由国民社）に載った曲の数々です。このうち何曲のメロディを口ずさみ、何人の顔を思い浮べることができでしょうか。その数によって、あなたの世代が判ります。そう、それはまるで、あの脱脂粉乳を、給食の時に飲んだことがあるかないかの違いで、世代が判ってしまうのと同じようなものです。

「現代の若者にとって「音楽」はいっぱいのコーヒーを飲む以上に日常化され、不可欠の要素となってきました。リズムがあるところに若者がいる、若

## 『新譜ジャーナル』創刊号

者が集まるところにリズムが生れる。」と、『新譜ジャーナル』創刊号編集後記は語っている。若者たちは、アルバムで貯めたお金でギターを買い、自分たちでメロディーを奏で唄った。そんな時に便利に役に立ったのが、楽譜付きの雑誌『新譜ジャーナル』だった。あの頃、深夜机に向い、英語のリーダーの教科書を開いていると、クラウン英和辞典のかたわらの古びたラジオから、北山修や落合恵子のDJの声がかレッジ・フォークと共に流れていた。時代は正に、反戦・学生運動のまっただ中であつた。

昭和六十二年六月。『新譜ジャーナル』の一冊一冊をめくっていると、その曲が流行っていたころの自分が見えてくる。高校三年の秋、文化祭の最終日。校庭のファイヤーストーム、オレンジ色の炎の光の中、学生服の僕らとセーラー服の彼女らは、最後にシューベルツの『風』を歌った。「人は誰もただ一人旅に出て…人は誰も…そこにはただ風が吹いているだけ、吹いているだけ」そんな時代だった。(T・H)